

緒言

——道徳と進化はどのように関わってきたのか

横路 佳幸

ダーウィンの進化論以降、私たち自身の心や行動に対する見方は一変したと言っても過言ではないだろう。たとえば、自己意識や合理的思考といった能力は、私たちの祖先が長い年月をかけ環境に適応した結果——自然選択という進化論のプロセスを通じて——獲得されたものであり、それがいかに高度な能力であれ実際にはそれほど特殊なものではない。私たちに特有とかつて考えられた、その他の知的な諸活動・振る舞いも同様である。進化論が教えるところでは、私たちとは差し詰め、動物とは一線を画する神によく似た特殊な被造物なのではなく、他の動物と同じように、進化論的メカニズムによって形作られた生物種としてのヒト（ホモサピエンス）なのである。

しかし私たちは、動物としての顔を持つ一方で、明らかに、高度な道徳性を備えた存在者という顔も持っている。私たちが普段行っている判断・行為は、「正当な理由なく人を傷つけてはならない」といった義務や「核兵器は廃絶すべきである」といった規範に影響され、他者への共感、もしくは不正で残酷な行為に対する怒りなどの情動に揺れ動かされる。道徳的な要素抜きでは、社会を成立させ日々の暮らしを営むことすらできない。そう思えるほどに私たちのうちには道徳的思考・感情が深く埋め込まれている。だとすると、先の進化という観点のもとで次のような疑問が生まれるのは至極真っ当だと思われる。すなわち、道徳的な判断・行為・反応などの総体としての道徳性はやはり、私たちヒトが自然選択という過程を経て進化する中で獲得したものなのだろうか。より踏み込んで述べれば、この問いは次のように言い換えることができる。私たちが営む社会・日常に溶け込んでいる道徳性は、自然選択を通じた進化論のプロセスとどのように関係し、そしてこの関わりは一体いかなる帰結を伴うのか、と。

この問いを考えるにあたっては、少し歴史をひもといてみるのがいいかもしれない。特筆すべきことに、道徳と進化を結び付けようとする試みは、英米系の（いわゆる分析的な）哲学者・倫理学者の間では、長らく評判が芳しくないものだった。その主たる理由の一つは、19世紀後半にイギリスで誕生した進化倫理学（evolutionary ethics）に対する当時の反応が関係しているように見える（cf. Levy 2016; Ruse and Richards 2017）。『人間の由来』（ダーウィン 2016; 原著は1871年刊）においてダーウィンは、知的能力や感情ばかりでなく私たちに特徴的な道徳的能力もまた進化論的な起源を持っていると主張したが、ダーウィンの思想を拡大解釈した

ハーバート・スペンサーは、「進化」の概念を人間社会や道徳性そのものにまで適用することを試みた。スペンサーの考えでは「進化」とは、種をよりよい方向へと向かわせるような、自然のいわば進歩的で目的論的な力であり、生存闘争を経てより優れて進化した振る舞いこそがよりよい振る舞いである。それゆえ、私たちには「進化」プロセスを滞りなく促進するという道徳的責務が課せられ、生存闘争・淘汰を経ることで人間社会もよりよいものへと「進化」していくと考えられた。

こうした進歩主義的な見方に対し、真っ向から異を唱えたのは、同時代の倫理学者ヘンリー・シジウィックである。ある論文 (Sidgwick 1876) でシジウィックは——道徳性の起源が進化によって説明される可能性を認めつつも——特定の道徳原理・命題を進化論の観点から正当化する試みに強硬に反対し、その思想的系譜を引き継ぐジョージ・エドワード・ムアもこれと同様の路線を継承した。よく知られているように、『倫理学原理』(ムア 2010; 原著は1903年刊) でムアが「自然主義的誤謬」の代表例として槍玉に挙げたのは、よい行動を(相対的に)より進化した行動とみなすスペンサーの見解だった。「これはよいか」という問いと「これはより進化しているか」という問いとの間には大きな隔たりがある以上、単なる事実に関する自然主義的な前提(「である」)だけから、特定の価値評価に関する結論(「べき」)を導くことはできない。こうしたムアの強力な議論が引き金となり、多くの哲学者・倫理学者は以後数十年にわたって、道徳の判断・性質を進化へと結び付けることに慎重な姿勢をとることになった。ここに追い打ちをかけたのは、戦後からほどなくして、スペンサー主義的思想といわゆる優生思想(eugenics)の癒着が大きく取り沙汰されたことである。進化を社会の発展における「あるべき進歩」と読み替える思想は、「適者生存」の名のもとで「弱肉強食」の論理を正当化するものと理解され、19世紀末から20世紀初頭にかけて植民地主義や人種差別主義の強化などに政治利用された⁽¹⁾。こうした歴史的経緯への反省から、道徳と進化を架橋する進化倫理学は——ちょうどスペンサー主義的思想の衰退と軌を一にするように——その求心力を確実に失っていった。

風向きが変わり始めたのは、1960年代の進化生物学において、「利他的行動」や「利他性」が大きな注目を集めるようになってからである。利他的行動とは、自らの適応度(一生のうちで次の世代に残す子の数)を低下させる代わりに、他個体の適応度を向上させるいわば自己犠牲的な振る舞いを指す。これは、ヒトはもちろん、ハチやアリから粘菌に至るまで生物界で広

(1) スペンサーの思想に触発され、「適者生存」の原理を社会や人種のあり方にまで適用した(現在では悪名高い)立場は社会ダーウィニズム(social Darwinism)と呼ばれ、19世紀末には全世界で一世を風靡したとされるが、その一方で社会ダーウィニズムはスペンサー自身の思想というわけではないということには注意しておく必要がある。スペンサーの思想とスペンサー主義的思想を混同して、前者を社会ダーウィニズムへと押し込むことは歪曲化の誹りを免れない。スペンサーの倫理思想の豊饒さとその時代的・思想史的背景については、久野 2018; 柘植 2020, 238頁以降; 児玉・藤田・久野 2021を参照。ちなみに、社会ダーウィニズムとは無縁と一般に考えられているダーウィン自身の(『人間の由来』における)記述の中には、現在では差別的もしくは優生思想的と受け取れるものが含まれている。

く見られる行動であるが、そうした「不利な」行動がこんにちまで淘汰されずに進化してきたことは、一見すると不可解である。通常、環境にうまく適応した適応度の高い遺伝子の変異は、個体の生存・繁殖の確率を向上させ、子へと遺伝していくことで、最終的には同種の集団全体へと広がる。裏返せば、自らの生存・繁殖を犠牲にして適応度の低い行動を促す遺伝子の変異は、選択圧によって集団から本来淘汰されるはずだが、各動物の振る舞いを見ると実際はそうになっていない。利他的行動が進化してきたという事実は、端的に言えば、適応度を向上させるメカニズムとして自然選択を中核に据える進化論的な説明とは相容れないように見えたのである。

利他的行動や協調的な行動を説明するという難題への対処は、結果として進化生物学の華々しい発展をもたらした。その成果の一部は、やがて様々な理論・考え方として結実することになった。具体的には、血縁者の適応度を考慮に入れる「血縁淘汰理論」、短期的にはコストがあるとしてもあとで見返りを得ることで長期的には適応度を向上させる「互恵的利他主義」、施しを与えた相手とは異なる別の他者から見返りを得る「間接互恵性」などである。どの理論にも共通しているのは、自然選択を用いた進化論的な説明でも（すべてではないにせよ）利他的行動を問題なく説明することができるという点である。こうした展開と歩調を合わせるかのように、1970年代以降になると進化倫理学も——社会生物学や進化人類学、進化心理学、生物学の哲学、道徳心理学の興隆と交錯しながら——徐々に復活の兆しを見せ始める。もし共感や良心などの道徳に関わる心理的能力が、利他性を促すために自然選択によって進化してきたものなのだとしたら、私たちヒトの道徳性の起源や仕組みは、進化論の観点から十分に説明できるかもしれない。少なくとも私たちが普段行っている道徳的な振る舞いは、生物界で広く見られる利他的行動や適応度を高めるその他行動を萌芽としていると言ってよいだろう。かくして、道徳と進化という二つのテーマは——以前とはまったく異なる仕方ではあるものの——再び巡り合うことになった。

そして21世紀に突入すると、道徳と進化は、哲学・倫理学を中心として、より一層の蜜月時代を迎える。その契機は、進化論的暴露論証（evolutionary debunking argument; 以下EDAとする）が積極的に展開されたことにある。EDAには様々なタイプがあるが、その様式の一つは簡単には次のように要約できる。すなわち、ある道徳判断・信念は、適応度を高める行動を促すという意味で自然選択のもとで得られたものにすぎない限り、客観的な道徳的事実を追跡することに成功した結果の産物ではなく、それゆえに当の判断・信念は、認識的に正当化されず決して道徳的知識にはならない。こうした懐疑論的結論を導く際にポイントになっているのは、ある道徳判断の進化論的な説明は——道徳的真理がこの世界に本当に存在するのだとしても——その判断が道徳的真理に即したものであることを保証してくれないという点である。

いまのポイントを、道徳と知覚の両ケースの比較を通じて確認しておこう。たとえば私たちは、知覚能力のおかげで身近な物体がどこにあるかを比較的正確に検出することができる。この信頼できる知覚能力は、適応度を高める行動を促すものであるからこそ獲得されたものである。危険な敵が迫りくることを正確に検出できない生物は簡単に淘汰されてしまうだろう。言

い換えれば、私たちの知覚的信念が生存・繁殖に寄与するのは、私たちの祖先が周囲の環境を正しく表象できていたおかげであり、この信念がある程度正確で真であることは適応度の向上に明らかに貢献しているのである。しかし他方で、道徳の場合には同じことは当てはまりそうにない。継子（血の繋がりのない、配偶者の子）に関して形成される「継子は殺めてもよい」という信念は、自分の遺伝子をより多く残し適応度を高める行動へと駆り立てるものである限り、自然選択の過程で獲得されたことになるだろう。それは、当の信念が道徳的には許しがたい誤った信念だとしてもそうである。つまり、知覚と違って道徳の場合には、道徳的信念の真偽は適応度の向上にほとんど関係しそうにない。これまでEDAが標的としてきたのは、一般人の常識的な道徳的判断から成る通俗的な道徳理論のほか、道徳的直観を用いる（規範倫理学の）義務論や、心的独立な道徳的真理を措定する（メタ倫理学の）実在論などである。それら諸理論で問題となる道徳判断・信念は、自然選択に基づく進化論的な起源を持つ限り、道徳的真理を追跡することなく誤ったものである可能性が非常に高いと「暴露」される。ゆえに、道徳性の進化に関する科学的な説明を放棄するの でなければ、一連の道徳理論は——その支持者の多さにもかかわらず——斥けられねばならない。

以上の（ざっくりとした）歴史的背景を念頭に置いたうえで、この「緒言」冒頭で問うた次の疑問に戻ろう。すなわち、私たちが営む社会・日常に溶け込んでいる道徳性は、自然選択を通じた進化論のプロセスとどのように関係し、そしてこの関わりは一体いかなる帰結を伴うのか。この疑問に真剣に向き合うということはいまや、道徳に関連して進化してきた多様な心理的能力や、進化論に基づき道徳判断・信念を暴露するEDAという論証を考察することから無関係ではありえないはずである。そこで「道徳と進化」というテーマに焦点を合わせるにあたり、本特集では主に哲学・倫理学の視座から、道徳に関する特定の心理的能力の起源や本性、そしてEDAの射程や可能性、限界などを考えることにしたい。本特集に収録されるのは、道徳心理学、哲学的心理学、規範倫理学、メタ倫理学などに跨る四つの論考である。本緒言を締めくくる前に、やや蛇足的ではあるが、各論考の概要を簡潔に記しておく。

まず、石田知子「怒りを伴う道徳判断は生得的基盤を持つか」は、道徳的な怒りに特化した神経基盤が生得的であるかを検討している。一方で石田は、経験的証拠などから、危害を認知することに結び付く道徳的な怒りは、道徳判断についての有力な神経基盤であると主張する。他方で、怒りとは特定の課題を遂行するために進化してきた心的傾向として理解可能だが（怒りの再調整理論）、わが国の外国人技能実習制度を巡る示唆的な事例から石田が示しているのは、道徳的な怒りと非道徳的な怒りはスペクトラムのように連続的で、両者の峻別は困難だということである。それゆえ石田は、道徳的な怒りに特化した生得的な神経基盤があるとは言いがたいとして、次の結論を導く。すなわち少なくとも怒りを伴う道徳判断においては、道徳は経験によって獲得されるものである、と。

次に、千葉将希「進化倫理学の新たな擁護——道徳的亜信念からの論証」は、「道徳的亜信念」という心的状態を取り上げ、それを通じて進化心理学と倫理学の関係を新たに捉え直すこ

とを試みている。千葉は、道徳的信念よりも原始的で、表象・感情・行動の三つの要素を含むような道徳的歪信念には、進化の影響が色濃く残っていることを指摘する。そのうえで、反人種差別的な信念を持つ多くの人々が実際には人種差別的な歪信念を持っているという研究を根拠に、進化心理学が明らかにしてきたものは、その多くが実際には道徳的歪信念だとする。最終的に千葉は、道徳的歪信念を解明する進化心理学は「どのようなことをなすべきか」という規範的な問いにも実り豊かな示唆をもたらすと主張し、それはとりわけ私たちの好ましくない歪信念を乗り越えることに役立つと論じる。

続いて、太田紘史「二つの倫理学領域における進化的暴露論証——対比と反省」は、EDAをメタ倫理学上の全面的なものと同範倫理学上の局所的なものに分類し、両者を様々な観点から対比している。太田は、全面的なEDAが抱えている三つの難点を剔抉する。第一に、全面的なEDAは道徳の範囲を超えた懐疑論を招きかねず、懐疑論が道徳的信念に限られる根拠が不明である。第二に、進化的な説明と真理追跡的な説明が両立するケースに対して、全面的なEDAは適切な説明や論証を新たに用意せねばならない。第三に、文明の発展や科学的知見の蓄積によって形成された道徳的進歩に基づく信念は、全面的なEDAの餌食になることがない。これに対し局所的なEDAは、道徳的信念を導くものとして直観と推論を区別できることなどを根拠として、一連の難点を周到に回避できる。こうして太田は、局所的EDAの方がより工夫された論証であることを描き出している。

最後に、拙論「進化論的暴露論証とヒュームの構築主義——ストリートによる議論の批判的検討」は、最も有名なメタ倫理上のEDAの一つであるシャロン・ストリートによるものを取り上げ、その論証がストリートの擁護するヒュームの構築主義といかなる関係にあるかを批判的に検討している。彼女のEDAは、一見するとヒュームの構築主義の擁護に一役買っているように見える。しかし、彼女が「合理的反省」もしくは「実践的観点からの吟味」という主観主義的なプロセスや、「価値づけ」という進化の産物であるか疑わしい独特の心的状態に頼る限り、EDAはヒュームの構築主義の擁護に役立たないか、あるいは両者は緊張関係にさえある。このことから私は、道徳の進化論的な説明と道徳のヒュームの構築主義的な説明は必ずしも相性がよいわけではないと結論づける。

本特集は以上の通り四つの論考から成るが、翻ってわが国における関連文献の出版状況を見ても、私たちヒトの道徳と進化について論じる文献が近年、様々な分野から続々と刊行されている（ハイト 2014; グリーン 2015; ジェイムズ 2018; 笠木 2019; トマセロ 2020; ランガム 2020）。ついでに、本特集が「道徳と進化」という主題に一石を投じるものとなり、今後の進化倫理的な議論・交流が、分野の垣根を越えさらに盛り上がることを願うばかりである⁽²⁾。

(2) 本稿の草稿に有益なコメントをくださった千葉将希氏と久野真隆氏に厚くお礼申し上げます。なお、本研究はJSPS 科研費 (JP20J00631) の助成を受けたものである。

参考文献

- Levy, N. 2016, "Introduction", in N. Levy ed., *Evolutionary Ethics*, vol. 3, New York: Routledge.
- Ruse, M. and R. J. Richards, 2017, "Introduction", in M. Ruse and R. J. Richards eds., *The Cambridge Handbook of Evolutionary Ethics*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Sidgwick, H. 1876, "The Theory of Evolution in Its Application to Practice", *Mind* 1 (os), 52-67.
- 笠木雅史 2019 「進化論的暴露論証とはどのような論証なのか」, 蝶名林亮 (編著) 『メタ倫理学の最前線』所収, 勁草書房.
- グリーン, ジョジュア 2015 『モラル・トライブズ——共存の道德哲学へ』(上下巻), 竹田円 (訳), 岩波書店.
- 児玉聡・藤田祐・久野真隆 2021 「ハーバート・スペンサー生誕200周年」, 『イギリス哲学研究』第44号, 93-100.
- ジェイムズ, スコット 2018 『進化倫理学入門』, 児玉聡 (訳), 名古屋大学出版会.
- ダーウィン, チャールズ 2016 『人間の由来』(上下巻), 長谷川真理子 (訳), 講談社.
- 柘植尚則 2020 『近代イギリス倫理想史』, ナカニシヤ出版.
- トマセロ, マイケル 2020 『道德の自然誌』, 中尾央 (訳), 勁草書房.
- ハイト, ジョナサン 2014 『社会はなぜ左と右にわかれるのか——対立を超えるための道德心理学』, 高橋洋 (訳), 紀伊國屋書店.
- 久野真隆 2018 「ハーバート・スペンサーにおける個人主義思想の再検討」, *Journal of Science and Philosophy* 1, 6-24.
- ムア, G. E. 2010 『倫理学原理』, 泉谷周三郎・寺中平治・星野勉 (訳), 三和書籍
- ランガム, リチャード 2020 『善と悪のパラドックス——ヒトの進化と〈自己家畜化〉の歴史』, 依田卓巳 (訳), NTT出版.